

祭礼を「維持」することの意味—佐原の町の「持続」の観点から—

Meaning of Maintenance of Traditional Festivals :from Viewpoint of City's Sustenance

学籍番号 47-156743

氏名 清水 賢一 (Shimizu, Kenichi)

指導教員 清水 亮 准教授

1. 社会背景

2016年、無形文化遺産に登録された山・鉾・屋台行事は、その殆どが地方都市の曳行祭から構成されており、既存の都市祭礼研究は様々な事例地のフィールドワークから、そのような伝統的祭礼の社会文化的特性と地域固有に存在する祭礼の様態を描き出してきた。

一方で、長らく続く共同体の解体と生活様式の均質化の時代の中で、その担い手は方途を尽くしながら、その維持問題に直面せざるをえない。とりわけ、絶対的な担い手の減少は、従来どおりに祭礼を続けていくことを困難なものにしていた。

2. 研究の目的と位置づけ

本研究は、地方都市の祭礼維持問題に焦点を当て、祝祭的行為である「祭礼の維持」が当該地域においていかなる意味を有しているかを明らかにし、その上で、伝統的祭礼の「維持」概念の検討を行うものである。

祭礼維持に関する既往研究は、主に旧来の民俗学的視点による「伝承」と後発的・分野横断的な「維持」の立場に立ってきたが。本研究は後者を参照しながらも、地方都市の「持続」との比較の観点から伝統的祭礼の「維持」の意義を捉えることを射程する。

3. 研究対象

本研究では、千葉県香取市佐原地区の祭礼組織とその担い手に着目する。中でも、Uターン者へのヒアリングを中心に調査研究を行った。本研究に登場するUターン者は、一度都心部に転出しながらも地元へ還流したキャリアを有し、その多くは家業を継いでいる。そのキャリアパスに焦点を当てることで、彼らがどのような地縁・人縁関係の中でUターンし、祭礼の「維持」が行われてきたかを記述する。

4. 研究方法

2016年6月よりA町内の祭礼運営組織である若衆連合での参与調査を行い、Uターン者を中心にその他の担い手や家族を含めた関係者に適宜ヒアリング調査を行った。

また、2015年度より千葉県香取市佐原地区のまちづくりに関わる個人・組織を対象としたヒアリング調査(2015年5月～12月)や地元の学校組織・行政組織・NPO団体・市民団体等と連携したアクションリサーチ(同年10月～)から佐原のまちづくり組織について調査を行っている。

5. 佐原地区と社会状況

佐原は、千葉県北東部に位置する香取市の一地区である。香取市は、2006年3月に

佐原市（現在の佐原）と香取郡に属する小見川町、山田町、栗源町が合併することで生まれた、人口 78,982 人（2017 年 1 月時点）の市である。利根川をはさんで茨城県潮来市と接しているが、中でも佐原地区は江戸時代より利根川水系によって形成された水郷の町としても知られる。地区の人口は、42,121 人（2016 年 4 月時点）である。

佐原地区を含む香取市の人口は 1985 年のピーク以降、自然増減・社会増減ともに恒常的な減少傾向にあるが、年齢階級別の人口移動に着目すると、10 代後半から 30 代、とりわけ就職・結婚を契機とする 20~24 歳、25 歳~29 歳の転出超過が著しい町となっている。



図 1 佐原地区図 (S=1:15000)

6. 祭礼の成立と時代的変容

6-1. 佐原の概要

佐原の山車祭は、小野川右岸に位置する本宿・八坂神社の 7 月の祇園祭と、小野川左岸の新宿・諏訪神社の 10 月の大祭の総称である。夏には 10 台、秋には 14 台の山車が各町内で盛大に曳き廻される伝統的な曳

山祭であり、その起源は、旦那衆、とりわけ水運業で富を蓄積した商家・醸造家・豪農地主が町内の蔵方・職人をねぎらうために付け祭を盛大に行ったことにある。江戸中期には町内単位の曳き回しが行われており、山車を保有する町内のほとんどが数百年単位で祭礼に参加している。

6-2. 祭礼の時代的変容

江戸中期の町衆による生活共同をもとにした強固な伝統的都市祝祭として定着した佐原祭礼は、それぞれの時代的背景によって、その階層的な支配と閉鎖的な祭礼集団の編成が揺らぐこととなった。中でも幕末・明治期の近代産業化は、祭礼の決定権を町人一般に開き、既存の旦那衆と異なる新しい商人がリーダーとして地域に参入する契機となっている。そして、明治・大正期には佐原の山車祭は今日みられる様態・組織を確立させるに至っている。

しかし、昭和中期以降の商業停滞の時代は佐原の「町衆の祭り」として成立するための社会的基盤を少しずつ瓦解させていった。現在は、町内の若い女性が「女衆」「娘連」として曳き回しに参加するようになったほか、町内・周辺地域間で相互に「他町曳き」が見られるようになるなど、周縁に位置する担い手の流動化が進みつつある。

7. 祭礼組織と「維持」問題

7-1. 年齢階梯的な祭礼組織

町内単位で行われる佐原の祭礼は、山車の曳行に多くの人員を要することから、いずれの町内も、20 代から 40 代男性で構成される若衆の人数は 40~60 人、曳行の安全管理や他町との連携を行う当役が十数名、綱先を曳く幼稚園から小学校 6 年生までの

小若が数十名、30代までの女性で構成される女衆が20～30人程度みられることから、一町内あたり100人～200人ほどの曳き手によって曳行が行われる。

実質的な祭礼運営と曳行は、若衆の集まりである若連によって担われており、今日においても厳しい年齢・役職階梯制度を敷かれ、町内ごとの単一共同体的な祭礼運営が保たれている。

7-2. 「他町曳き」と「祭礼エリート」

このように大規模な人員を動員する一方で、町内の人口・世帯数・面積はそれぞれ大きく異なっており、今なお厳格な自町内制度を敷くことができる町内がある一方で、自町居住者が少数となっている町内も見られる。佐原においては、夏と秋にそれぞれ同規模の祭礼が行われていることもあり、町内相互に曳き手が周流する「他町曳き」が頻繁に見られ、居住者の少ない町内は「他町曳き」によって曳き手を確保している。

しかしながら、「他町曳き」は祭礼組織のなかで「周縁」に位置する担い手であり、自町出身者・居住者・成人男性という「祭礼エリート」とは大きく隔たった存在である。

今日においても「祭礼エリート」の存在は祭礼組織の前提となっており、居住者の少ない町内は、少数の自町出身者を役職に就かせることで祭礼組織を「維持」してきた。しかし、「祭礼エリート」を準備できな

8. 「維持」される祭礼と主観的意味

8-1. 祭礼組織とUターン者

都心部への通勤・通学圏外に位置する佐原は、地域の若年層にとって社会経済的条件から選ばれることの難しい町となった。一度は地元を転出しながらもUターンによって佐原を「終の棲家」に選ぶ者もある。それは全体から見れば少数ではあるが確かに存在しており、そういったUターン者が自町内の祭礼に関わり続け、祭礼組織を支え続けるケースもある。

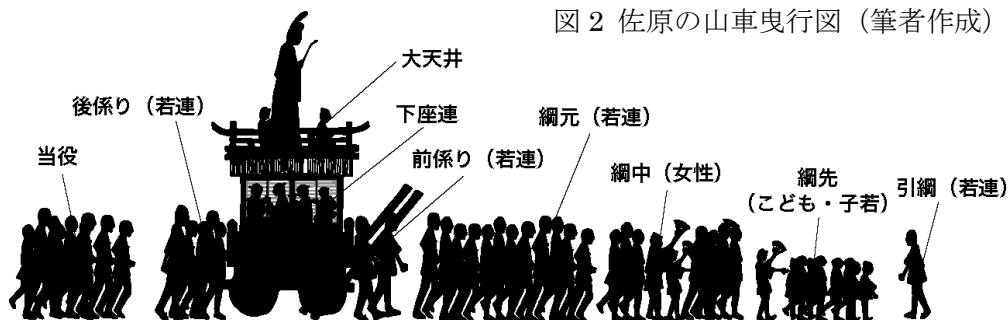
高校卒業後そのまま職を得て佐原に住み続ける、あるいは大学進学を機に地元を離れるもいずれかの時点で佐原に還流するというライフコースのうち、後者の存在は少数ではあるが、選択できない縁＝地縁・人縁によって地元に戻っていく。Uターン者と祭礼組織との関わりは、ある意味で地縁・人縁の強さを象徴的に示している。

8-2. Nさんの事例分析

8-2-1. Nさんのキャリアと祭礼

Nさんも家業を継ぐために地元に戻流し、A町の若衆連合に所属しながら祭礼に係わり続けている担い手であるが、国立大学の理系を卒業し、都内の石油元売企業に就職したNさんにとって、佐原に戻ることは自らの大卒としてのキャリアを宙吊りにすることを意味していた。

図2 佐原の山車曳行図（筆者作成）



また、Nさんは山車の先頭に立つ前係りの一員としてA町の祭礼組織の「中心」にある。同世代の担い手が祭礼組織を去っていくなかで町内旧家の自営業者であり、「祭礼エリート」の有資格者たるNさんは祭礼組織内において代替不能な担い手として機能しており、選べない縁としての祭縁のしがらみの中で山車祭りを担い続けてきた。

8-2-2. 祭礼の主観的意味

Nさんにとって、佐原の山車祭りは地元「面倒臭さ」を象徴するものでもある一方、「なかったら、この町はとっくにだめになっている」ものとして町内にとってなくてはならない存在であると語る。「逃げ出したい」場所とさえ語るように、そこにはUターン者としての強い葛藤があり、その思いを一元的に説明することは困難である。均質化の進む社会に抵抗するような自町出身者・居住者によって成り立っている祭礼の存在は、山車町内によって構成される佐原という町が「佐原である」と不可分なものとなっている。

9. 「祭礼の維持」と「町内の持続」

9-1. 「維持」と「持続」

生活様式の変化と共同体の解体の現代にあっても、佐原の祭礼は氏子町内の単一共同体的な組織体に執着しながら、その様態を「維持」してきた。この点において、佐原における「維持」とは、変化を拒んでさえも「変わらずに在り続け」ようとする営為である。祭礼を「維持」することによって、佐原の人びとは「町内で生きる」「佐原で生きる」ことをビビッドに感じ取っているのである。絶え間なく行われる行為としての祭礼は、社会集団としての佐原を存続させる

一つのバロメーターであった。

9-2. 「祭礼」と「町内」

佐原においては、変わらず在ろうとする祭礼の存在が町内の社会的機能を否応なしに「持続」させている。周期的に行われる祭礼は、町内中の老若男女を動員し、変わらぬ規模と様態を維持することによって、町内の存在を成員に確認させるものであった。三日三晩、2トンに及ぶ山車を自町内の人間だけで曳き回したという実感によって、彼らは祭礼に町内を「仮託」することが可能になるのである。

しかし、喫緊の人口減少と産業の空洞化に直面する中で「変わらずに在ろうとすること」の限界を迎えつつある。数人しか自町居住者の残っていない町内では、他町内では数年で交代するような役職を10年近くの間、同一人物に担わせることで続けてきたが、それさえも困難になり、初めて祭礼への参加を断念することを検討する町内が見られた。「維持」と「持続」のせめぎ合いの中で祭礼を続けてきた担い手たちは、やがて一つの曲がり角を迎えざるをえないのである。

9-3. 祭りを「維持」していくこと

本稿が主題としている佐原の祭礼の「維持」問題とは、社会集団としての佐原の町の「持続」に関わる問いである。そこには、逃れられない人縁・地縁の中で生きることの葛藤や難しさを含みながらも、それでも「佐原で生きていて良かった」と人びとに思わせるだけの意味が存在していた。私たちは佐原の山車祭から、そのまま在り続けようと努力する、今日の地方都市の一つの姿を読みとることができるだろう。